

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02010

研究課題名(和文)人間の「脆さ」に着目した状況依存のかつ相互依存的な行為者概念の学際的研究

研究課題名(英文)An interdisciplinary study of human agency: taking vulnerability and interdependency seriously

研究代表者

早川 正祐 (Hayakawa, Seisuke)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・特任准教授

研究者番号：60587765

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、従来の行為者理論において見落とされてきた、人間の「脆弱性」(vulnerability)に着目することにより、自発的な制御を基調とする主流の行為者概念を、より相互依存性・状況依存性なものとして捉え直すことを目的としてきた。その際、行為論・倫理学・現象学・社会学の研究者が、各分野の特性を活かしつつ領域を横断した対話を行った。この学際的研究により、個別領域にとどまらない理論的な知見を深め、行為者概念について多層のかつ多角的な解明を進めることができた。

研究成果の概要(英文)：We highlighted human vulnerability and its related notions such as suffering, empathy, care, receptivity, and responsibility, thereby successfully providing a more nuanced picture of human agency than mainstream action theorists did. Many of theorists on human agency have placed an overriding emphasis on the self-governing dimension of agency, and thus largely overlooked the vulnerable aspects that are central to understanding the nature of relational agents like us. To fill in this lacuna, we adopted an interdisciplinary approach, and fully explored the fundamental implications of human vulnerability for the theory of human agency.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：脆弱性 ケア 依存性 共感 責任 道徳的運

## 1. 研究開始当初の背景

私たちは、他に依らず自足している行為者であるよりも、むしろ、自分の意のままにならない他者や状況に依存し翻弄されつつ行為するような、「脆さ」を抱えた行為者であるように思える。

しかし、従来の行為者理論においては、能動性の高い、行為者の「自己決定的」な側面や「自己統御的」な側面が重視されてきた。そのため「行為者のありようが周囲の他者や状況に意のままにならない仕方では左右される」といった受動的な側面は、きちんとした形で主題化されることがなかった。このような傾向は、行為者理論の代表的論者である M・プラットマン、C・コースガードなどにおいて顕著であるし、国内における研究においても同様の傾向が見られる。

主流の分析哲学的な行為者理論にとくに見られるこのような能動性偏重の行為者概念に対して、本研究は他分野からの知見を取り入れ、「脆さ」(もしくは「傷つきやすさ」)をはらんだ人間の行為者の複雑な実態に迫りうる理論的枠組みを構築する。その際、他者への依存と状況への依存という互いに関連する二つの観点から、「脆さ」を抱えた行為者性を解明する。その考察を踏まえた上で、従来の自己統御重視型の「実践的合理性」の捉え方に関しても、「自分自身が抱える脆さや、他者が抱える脆さにどう関わり、応じていくべきか」という観点から、再考することになる。とりわけ、ケアの倫理・フェミニスト倫理・現象学的行為論・社会学的行為論・社会的承認論など、幅広い分野から豊かな知見を結集させることで、相互依存的で状況依存的な行為者の様々な位相を整理し、さらに、それらの位相の相互の連関を明らかにする。以上の一連の作業を通じて、現実の複雑さに十分に見合った行為者理論を提示する。

## 2. 研究の目的

本研究は、従来の行為者理論において見落とされてきた、人間の「脆さ」に着目することにより、これまで個人主義的に捉えられてきた行為者概念を、より相互依存的・状況依存的なものとして捉え直すことを目的とする。その際、行為論・倫理学・現象学・社会学の研究者が、各分野の特性を活かしつつ領域を横断した対話を重ねる点に、本研究の特徴がある。この学際的研究により、個別領域にとどまらない理論的な知見を深め、行為者概念について多層的かつ多角的な解明を進めることで、哲学的行為論の新たな実践的射程を開くことを目指す。

## 3. 研究の方法

本研究では、脆さと依存性をはらむ行為者の、複雑に入り組んだ全体像を、以下の(1)～(3)の三つの側面(事象論・概念論・規範論)から——ただしこの三つの側面を互いに関係づけつつ——明らかにする。それによって、「脆さと依存性に根ざす行為者理論」を、従来の「自己統御に根ざす行為者理論」の不備を補う理論として、またその代替となるような包括的な理論として構築する。

- (1) 行為者が抱える「脆さと依存性」に関する事象分析(事象論)
- (2) 行為者が抱える「脆さと依存性」に関する概念分析(概念論)
- (3) 脆さを抱えた行為者に関する実践的合理性の分析(規範論)

## 4. 研究成果

(1) 1990年代以降のケアの倫理の代表的論者たちが、「人間は脆弱性や依存性を不可避に抱える」という事実に基づき、どのようにケアをめぐる責任に関する議論を展開しているのかを検討した。そうした検討を通して、他者応答的な行為者概念を提示した。(2) 他者の混沌とした苦しみ(とりわけ病苦)に対するケアにおいて、私たちの「身体的な脆さ」がどう複雑に作用するのかを考察した。そのうえで、ケアにおける「認識をめぐる責任」について、現代の社会的認識論を参照しつつ、認識上の摩擦という観点から論じた。(3) フェミニスト倫理学における関係的な自律論について批判的に検討し、自己統御の概念を責任概念と結びつけることで、伝統的な自己統御概念とは異なる関係的な自己統御の概念の提示を試みた。(4) 「性」の表明や「男/女らしさ」の問題に関して、自己物語、自由意志、自律性、情動に関する哲学的議論を参照しつつ考えた。その際、日本におけるトランスジェンダーの医療化をめぐる状況も考察した。(5) フッサール、レヴィナス、ハイデガー等を参照しつつ、共感や共苦といった事象を、傷つきやすさの観点から考察し、その倫理的含意を明らかにした。(6) 現代英語圏における道徳的運の議論を検討し、ままたらない人生における運と道徳性の関係性について批判的に考察した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計14件)

(1) 「この世界を信仰すること」(2015)

著者名: 吉川孝

雑誌名: 『ハイデガー・フォーラム』

巻: 4

ページ: 77-91

- (2) 「男らしさ/女らしさ」とナラティブとしての生物学的本質主義—男女共同参画の困難の根元を考える」(2015)  
著者名：筒井晴香  
雑誌名：『理想』  
巻：695  
ページ：146-157
- (3) 「能力と無力感のあいだで：アビリティの現象学序説」(2016)  
著者名：池田喬  
雑誌名：『共生のための障害の哲学 (UTCP-Uehiro Booklet 12)』  
巻：2  
ページ：9-28
- (4) 「言葉を使って痛みを他人に伝えることはできるか：痛みの表現における発話行為と比喩の使用についての考察」(2016)  
著者名：池田喬  
雑誌名：『看護研究』  
巻：49  
ページ：276-284
- (5) 「フッセリアーナ第39巻『生活世界』を読む——確実性、根源的獲得、正常性をめぐって」(2017)  
著者名：吉川孝  
雑誌名：『フッサール研究』  
巻：14  
ページ：185-200
- (6) 「苦しみの認知からの逃避と認識をめぐる責任——ケアの認識論に向けて」(2017)  
著者名：早川正祐  
雑誌名：『グリーンケア』  
巻：5  
ページ：95-110
- (7) 「証言と徳——ヒュームの証言論」(2017)  
著者：萬屋博喜  
雑誌名：『哲学』  
巻：68  
ページ：231-245
- (8) 「現代の英米圏の倫理学における運の問題」(2017)  
著者：古田徹也  
雑誌：『社会と倫理』  
巻：32  
ページ：3-14
- (9) 「道徳における客観性と感情—『倫理学入門』を読む」(2017)  
著者：八重樫徹  
雑誌：『フッサール研究』  
巻：13  
ページ：190-205

- (10) 「価値に触れて価値を知る：フッサールと情動の知覚説」(2017)  
著者：八重樫徹  
雑誌：『フッサール研究』  
巻：13  
ページ：104-117
- (11) 「順応と逸脱、あるいは道徳性の自然な捉え方——ハイデガー『存在と時間』におけるダス・マン論の再読解と新展開」(2018)  
著者：池田喬  
雑誌：『現代思想』  
巻：2018年臨時増刊号2号
- (12) 「ヘーゲルと英語圏の現代哲学」(2018)  
著者：川瀬和也  
雑誌名：『理想』  
巻：700  
ページ：121-133
- (13) 「共同行為と諒解：M.ヴェーバーによる共同志向性の理論」(2018)  
著者：木村正人  
雑誌名『行為論研究』  
巻：4  
ページ：1-24
- (14) 「脆弱性・依存性・応答性をはらむ行為者性概念へ——現代行為論からケアの倫理へ——」(2018)  
著者：早川正祐  
雑誌：『文化交流研究』(東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要)  
巻：31  
ページ：11-26

〔学会発表〕(計15件)

- (1) “Autonomy and the Emotions” (2015)  
発表者名：Toru Yaegashi  
学会等名：International Workshop: “Knowledge, Action, and Virtue”,  
発表場所：the Center for Advanced Education for Working Professionals, Japan Advanced Institute of Science and Technology  
年月日：2015-05-31
- (2) 「『レヴィナス的倫理学』のために」  
著者名：八重樫徹  
学会等名：レヴィナス研究会第21回例会  
発表場所：慶応大学  
年月日：2015-09-08
- (3) “Agency and Vulnerability: Daily Conception and Investigation in Feminist Philosophy”  
発表者名：Haruka Tsutsui  
学会等名：Finnish-Japanese Research Collaboration: International Symposium "Phenomenology of Vulnerability and Limits"  
発表場所：大阪大学

年月日：2016-03-03

(4) "Phenomenology of Posture: A Perspective on Being Human as Vulnerable Being"

発表者名：Takashi Ikeda

学会等名：Finnish-Japanese Research Collaboration: International Symposium "Phenomenology of Vulnerability and Limits"

発表場所：大阪大学

年月日：2016-03-03

(5) "A Husserlian Account of Affective Cognition of Values,"

発表者名：Toru Yaegashi

学会等名：Consciousness and the World: Conference on Phenomenology - East Asia

発表場所：Tongi University

年月日：2016-06-03

(6) 「レヴィナス 経験の変様の倫理学」

発表者名：吉川孝

学会等名：レヴィナス研究会

発表場所：岡山

年月日：2016-08-06

(7) 「他者志向的な感情・感受性を中心に据えた徳倫理学の可能性」

発表者名：早川正祐

学会等名：第76回日本倫理学会大会

発表場所：東京

年月日：2016-09-30

(8) 「現代の英米圏の倫理学における運の問題」

発表者名：古田徹也

学会等名：第76回日本倫理学会大会・主題別討議「倫理学における運の役割」

発表場所：東京

年月日：2016-10-1

(9) 「関係的自律性と自己統御の困難」

発表者名：筒井晴香

学会等名：第55回哲学会大会

発表場所：東京

年月日：2016-10-30

(10) "Receptivity and Living Reflectively with Others"

発表者名：Seisuke Hayakawa

学会等名：Soochow International workshop on Knowledge and Action

発表場所：Taipei

年月日：2016-11-26

(11) 「現象学的倫理学に何が出来るか？：応用倫理学への挑戦」

発表者名：池田喬

学会等名：第38回日本現象学会大会

発表場所：東京

年月日：2016-11-27

(12) "Between being Able and being Powerless: A Phenomenology of Ability"

発表者：Takashi Ikeda

学会等名：7th PEACE (Phenomenology for East Asian Circle) Conference (University of Tokyo)

発表場所：東京

年月日：2016-12-17

(13) 「関係的自律性と真正な自己」

発表者名：筒井晴香

学会等名：道德・社会認知研究会

発表場所：東京

年月日：2017-03-04

(14) 「ケアの倫理に内在する「認識論」の展開に向けて」

発表者名：早川正祐

学会等名：第77回日本倫理学会大会 主題別討議「ケアの倫理——その変遷と展開」

発表場所：弘前

年月日：2017-10-7

(15) " Lay Judge, Common Sense, and Cruel Punishment"

発表者名：Masato Kimura

学会等名：German-Japanese Society for Social Sciences, International Symposium: Crisis of Democracy? Chances, Risks and Challenges

発表場所：Osnabrück

年月日：2018-3-26

〔図書〕(計6件)

(1) 『ケアの始まる場所 - 哲学・倫理学・社会学・教育学からの11章』(2015)

著者名：竹内聖一(編著)他

総ページ数：254

出版者：ナカニシヤ出版

(2) *Moral and Intellectual Virtues in Western and Chinese Philosophy: The Turn toward Virtue* (2015)

著者名：Seisuke Hayakawa, Chienkuo Mi, Michael Slote, Ernest Sosa, et al.

総ページ数：261(執筆部分：235-251)

出版者：Routledge

(3) 『性—自分の身体ってなんだろう？』(愛・性・家族の哲学 第2巻)(2016)

著者名：筒井晴香、藤田尚志・宮野真生子他

総ページ数：230(執筆部分：108-140)

ナカニシヤ出版

(4) 『フッサールにおける価値と実践—善さはいかにして構成されるのか』(2017)

著者名：八重樫徹

総ページ数：307

出版社：水声者

(5) 『現代現象学—経験から始める哲学入門  
(ワードマップ)』(2017)  
著者名: 八重樫徹、吉川孝、植村玄輝  
総ページ数: 328  
出版社: 新曜社

(6) 『ヒューム 因果と自然』  
著者名: 萬屋博喜  
総ページ数: 242  
出版社: 勁草書房

〔その他〕  
ホー ム ペー ジ 等 :  
<https://actiontheories.wordpress.com/>

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

早川 正祐 (Hayakawa)  
東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・特任准教授  
研究者番号: 60587765

### (2)研究分担者

竹内 聖一 (Takeuchi)  
立正大学・文学部・准教授  
研究者番号: 00503864

古田 徹也 (Furuta)  
専修大学・文学部・准教授  
研究者番号: 00710394

吉川 孝 (Yoshikawa)  
高知県立大学・文化学部・准教授  
研究者番号: 20453219

八重樫 徹 (Yaegashi)  
広島工業大学・工学部・准教授  
研究者番号: 20748884

木村 正人 (Kimura)  
高千穂大学・人間科学部・准教授  
研究者番号: 80409599

川瀬 和也 (Kawase)  
宮崎公立大学・人文学部・助教  
研究者番号: 90738022

池田 喬 (Ikeda)  
明治大学 文学部 専任准教授  
研究番号: 70588839

筒井 晴香 (Tsutsui)  
玉川大学・教育学部・非常勤講師  
研究者番号: 90760489

萬屋 博喜 (Yorozuya)  
広島工業大学・環境学部・助教  
研究者番号: 00726664

島村 修平 (Shimamura)  
日本大学・理工学部・助教  
研究者番号: 90801655

鈴木 雄大 (Suzuki)  
国際武道大学・体育学部・助教  
研究者番号: 20794928